

= LINER NOTE =

『SPECIALIST IN ALL STYLES / ORCHESTRA BAOBAB』

オーケストラ・バオバブの完璧な復活劇には、とにかく驚かされた。長年いろいろな音楽を聴いていると、さすがに多少のことでは驚かなくなるが、あのバオバブが再結成ライブを行い、15年振りに新作も発表すると聞いたとき、最初にわかには信じがたかった。しかし、その新作も遂に完成。しかもこの上なく素晴らしい仕上がりではないか。イサ・シソッコのテナー・サクソも、バテレミ・アティツソのエレキ・ギターも、バラ・シディベ、メドゥーン・ジャロ、ルディ・ゴミスのヴォーカルも昔同様に輝いており、バオバブのブリリアントでメロウなアフロ・キューバン・サウンドが完全に再現されているのだから全く驚きだ。キューバ音楽の世界的大ブームを巻き起こしたブエナ・ヴィスタ・ソシアル・クラブ（BVSC）に続いて、またしてもワールド・サーキットとニック・ゴールドにしてやられた気分だ。

* * *

オーケストラ・バオバブがセネガルの首都ダカールで誕生したのは1970年。結成メンバーは、パローン・ンジャエ（初代リーダーながら、すぐにイサ・シソッコと交代）、バテレミ・アティツソ、シデス・リー、バラ・シディベ、レイ・ンバウプ、ルディ・ゴミスの6人だった。当時はオルケスタ・アラゴーンやパチェコのパチャンガなど、キューバ音楽を中心にラテン音楽の人气が絶対的で、こうした楽団のコピーが大勢を占める音楽シーンの中、バオバブも当初はラテン・ナンバーを主なレパートリーとしていた。しかし、ラテン音楽をベースに西アフリカ各地の伝統音楽のエッセンスを融合させることで、オリジナリティー溢れるアフロ・キューバン・サウンドの創造に成功。実力・人気ともにスター・バンド、オルケストル・ナンバーワンと並ぶ、70年代のセネガルのトップ・バンドとして君臨した。

彼らがオーケストラ・バオバブを名乗ることになったのは、よく知られている通り、バオバブ・クラブの専属バンドとしてスタートしたことに由来するが、オーケストラといっても、そのサウンドはジャズやラテンのオーケストラのダイナミックなものと比較するとすいぶん印象が違うことだろう。オーケストラと自称したのは、ギニアなど周辺諸国のバンドの命名法にならったものであり、彼らが手本としたラテン・バンドへのリスペクトという風にも解釈できるだろう。実際セネガルにはオーケストラを冠したバンドが多い。またバオバブとはもちろんアフリカのサバンナで悠然とした姿を湛えている、あの巨木のことだ。バオバブという植物は、寿命数百年と長命であり、古くから王族など人が集う場所の役割を果たし、果肉から樹皮、種子まで無駄なく使われるほど有益でもある。こうした特長は自分たちのバンドと共通していると考え、メンバーたちもオーケストラ・バオバブという名前が気に入っていたらしい。

オーケストラ・バオバブが、アフロ・キューバンの模倣からいち早く脱し、他のバンドの追隨を許さない個性的なサウンドを完成させたこと、それが西アフリカで絶大な人気を博し、現在でもその音楽性への評価が高いことには、いくつかの理由がある。第一には、優秀なシンガーとプレイヤーが集まっていたこと。バオバブは60年代のトップ・バンド、スター・バンドから引き抜かれたミュージシャンを中心に結成されたので、最高の実力を兼ね備えた者が集結したのは自然なことだった。中でもバテレミ・アティッソという比類なきギタリスト、イサ・シソッコという創造性豊かなテナー・サクソ・プレイヤー、それに多彩なヴォイスをもつヴォーカリストが揃ったことは大きい。

2番目には、メンバー達のルーツがセネガル北部のサンルイと南部のカザマンスに止まらず、ナイジェリア、トーゴ、ギニアビサウ、マリ、カボヴェルデ、モロッコといった具合に、実に広汎な国と地域に及んでいたため、多様な音楽要素のミックスがなされたことだ。特にグリオの系譜に属する幾人かが持ち込んだ伝統音楽の要素は、バオバブの音楽性に色濃く反映している。例えば言葉ひとつとってもそのことが如実に示される。全盛期には5人のヴォーカリストを擁していたのだが、彼らはセネガルの公用語たるフランス語、ラテン音楽を通じて覚えたスペイン語、それにクレオールをも自在に駆使し、さらにはウォロフなどの民族言語でも自然に歌っていたのだから、これまでのアフロ・キューバンとはひと味もふた味も異なるものになって当然なのだ。特にレイ・ンバウプ（1937年生まれのウォロフ系シンガー）がポップスをウォロフ語で初めて歌ったことは、その後のセネガルのポピュラー音楽の発展に対する寄与を考えると見逃せない。

そして3番目の理由は、こうしたミュージシャンの結合と音楽性の混交が、ダカールという大都市でなされたことだ。ダカールは西アフリカを代表する港湾都市であり、人と物とが頻繁に交錯する特異点といえる。ハイライフやコンゴのルンバはもちろん、アメリカやフランスのポップスなどに接する機会も多かったに違いない。バオバブというとアフロ・キューバンのイメージが強いが、実際70年代中頃には、タマやティンバレスが連打される傍らでヴォーカル陣がシャウトを繰り返したり、ジェームズ・ブラウン張りの強烈なファンクを演奏するなど、当時のセネガルではかなり突出したサウンドも聴かせていた。つまり、オーケストラ・バオバブという真にコスモポリタンなバンドの中で、極めて多様な音楽要素が絶妙にブレンドされて生まれたのが、時に柔和で、時に妖艶で、時にまろやかで、そして時にエキセントリックなバオバブ・サウンドなのである。

70年代はバオバブ・クラブなどでのライブに加え、12枚ほどのLPをリリースするなど、旺盛な創造力を発揮して縦横無尽な活動を続け、看板シンガーレイ・ンバウプの自動車事故死という悲劇（74年）やバリ遠征の失敗（78年）といったトラブルも乗り越えてきたが（ちなみにセネガルを代表する名歌手

チョーン・セックがメンバーだったのもこの頃)、80年代に入るとユッサー・ンドゥールら若手の台頭によってその人気に翳りが出始める。ユッサーたちが編み出した、タマとサバルという伝統的パーカッションの強烈なビートが持ち味の新しいサウンド「ンバラ」への支持が高まり、バオバブの奏でるアフロ・キューバンは流行らなくなっていったのだ。そうした状況下、ンバラに方向転換しようとするメンバーと、あくまでもラテンに固執するメンバーとの間で意見に折り合いがつかなくなり、バンドは空中分解。メンバーが徐々に脱退していき、87年には遂に解散となった。

しかしバンドの崩壊が進む裏で、ヨーロッパで彼らの評価が高まっていったのは皮肉なことだ。82年彼らはあるスタジオ・セッションを行い、その録音をもとに2本のカセットを発表。そこに収められた12曲は優雅なバオバブ流アフロ・キューバンの結晶といえるもので、まさしく黄金のグループによる最後のマジック・モーメントが捉えられた一作だった。ほどなくこれが欧州の一部で注目され、現地盤カセットのコピーが繰り返されることでさらに評判が広まっていった。89年にこのうち6曲のLP化／CD化が実現、さらに2002年には12曲全てがCD復刻されたのだが、オリジナル・カセットが違法コピーを繰り返された(パイレートされた)ことから、『パイレーツ・チョイス』と題された。そしてこの一連の復刻を成し遂げた人物こそワールド・サーキットのディレクター、ニック・ゴールドなのだ。ニックはこの82年の録音を聴いて、バオバブと彼らのアフロ・キューバン・サウンドに惚れ込み、その復刻ばかりか、バオバブ・サウンドの再現も思い立つ。そして、かつての中心メンバーたちを呼び集め、ロンドンやサンルイなど数カ所でお披露目公演を行ったのに続いて、ようやく完成させたのがこの新作なのである。

レコーディングが行われたのは2001年11月、ニック・ゴールドとユッサー・ンドゥールの共同プロデュースの下、わずか10日間で、ほとんどスタジオ・ライブの感覚で録音されたという。収録された9曲全てが全盛期の主要レパートリーで、どれもほぼオリジナルに近い形で演奏されている。従ってかつての名曲を新鮮なサウンドで蘇らせることに主眼をおいた作品集といえよう。残念ながらオリジナルLPはいずれも激レア状態なので、彼らの代表曲がこうした形で多くの方に親しまれるのは望ましいことだし、何よりほぼ20年振りに勢揃いしたメンバーたちにとっても最も本領発揮できる選択だっただろう。実際、誰もが全くブランクを感じさせないパフォーマンスで、メロウでまろやかなバオバブ・サウンドは完全に蘇っていて、とにかく楽しい完成度の高いアルバムになっている。また、ゲスト参加したB V S Cの人気者イブライム・フェレールとユッサー・ンドゥールまで加えると、総勢8名がヴォーカリストとして名を連ねていて、曲ごとにリードを廻したりコーラスに下がったりと、主役交代するいつもの形をとっているため、ヴォーカルの多彩さも実に魅力だ。曲によって言語や歌い口を変えているために聴き分けは難しいかも知れないが、声に一番艶があり軽やかに歌っているのがメドゥーン・ジャロ。太くて男性的な声なのがバラ・シディベとルディ・ゴミスだが、B・シディベがふくよかな響きなのに対し、R・ゴミスの方がより野性的な声質である。そして粘っこく微妙な節回しが特徴的なウォロフ的ヴォイスを聴かせているの

が、ンジャガ・ディエンとアサン・ンバウプ。いずれもレイ・ンバウプ譲りの力強いハイトーンが魅力なのだが、新加入したA・ンバウプの方がやはり若々しい。

先に触れたように、ニックはこうした魅力を湛えるバオバブに惚れ込んだばかりではなく、それがひとつのきっかけとなってワールド・サーキットというレーベルを興すことを思いついたという。つまり、バオバブとの出会いがなければB V S Cは生まれなかったかも知れないし、逆にB V S Cの大成功がなければバオバブの再結成もあり得なかったことだろう。

また、ある意味バオバブを音楽シーンから追いやった張本人ともいえる（もちろん当人にそうした意識はなかったに違いないが）ユッサー・ンドゥールが、今回プロデューサーおよびヴォーカリストとして参加しているというのも歴史のなす面白さだろう。最初は1曲ゲスト参加しているだけと思ったのだが、再結成に際してユッサーはメンバー集めや自身のスタジオの提供まで買って出ているし、本作のセネガルでのリリースはユッサーのレーベルからになる予定で、改めて巡り合わせの不思議を感じる。

ところで『スペシャリスト・イン・オール・スタイルズ』つまり「あらゆるスタイルのスペシャリスト」というアルバム・タイトルは、彼らがあらゆるジャンルの音楽を吸収消化したスペシャリストを自負していることの表現であるとともに、アフリカ各地の床屋の壁に見かける絵が「どんなスタイルでもお任せ」とばかり様々なヘア・スタイルを描いていることに引っ掛けてもいるのだろう。こんなあたりの遊び心が何とも憎いのだが、確かにこのアルバムは繰り返して聴くほどクセになる素晴らしさだ。バオバブの音楽が昔と変わらず今も心地よく響くことは、彼らの生み出したサウンドの素晴らしさを示すばかりでなく、ユッサー・ンドゥールたちのンバラだけがセネガルのポピュラー音楽ではないことの何よりもの証拠となっている。

さてバオバブの奇跡的復活劇はまだまだ続きそうだ。2002年7月には全米ツアーが行われ、10月からはヨーロッパ8カ国を巡るツアーも開始。バオバブのメンバーたちは日本公演を希望する旨も伝えてきている。こうなったら、オーケストラ・バオバブの日本公演という新たな奇跡の実現に期待したい。

【メンバー紹介】

イサ・シソッコ (t s)

ダカール出身のテナー・サクソ奏者。マリ系グリオの家庭で育ちジェンベに親しむが、本人の希望はギター。しかし先生から半ば強制される形でサクソを手にした。元スター・バンドのデクスター・ジョンソンからの影響が大きく、90年代にはユッサー・ンドゥールのシュペール・エトワール・ドゥ・ダカー

ルの一員としても活躍。ユッサーのアルバム『THE GUIDE』の「Tourista」でのソロ演奏が印象深い。昨年はシュペール・ケイヨール・ドゥ・ダカールの新作に参加した他、パペ・フォール、マー・セック、ラバ・ソッセといった元スター・バンドのベテランたちとの共演アルバム（キューバ録音）も制作している。

チエルノ・コワテ（s s、a s、t s）

元シュペール・エトワール・ドゥ・ダカールのアルト、ソプラノ・サクソ奏者で、イサとともに『SET』、『EYES OPEN』、『THE GUIDE』の3作に参加。『EYES OPEN』の「Africa Remembers」のソロ演奏が記憶に残る。

バテレミ・アティツソ（g）

1945年トーゴ生まれ。セネガルで法律の勉強をするための資金捻出の手段としてミュージシャンになることを決意し、独学でギターを習得。ウェス・モンゴメリー、ケニー・バレル、BBキングといったジャズ／ブルース・ギタリストや、ギニアのケレティギ・トラオレ、コンゴのニコから影響を認めている。バオバブではバンドリーダーも務めたが、86年のR・ゴミスのソロ作『Toon Baaxul』への参加を最後にトーゴへ帰国。音楽活動から完全に足を洗い、弁護士活動に専念していた。

ベン・ジェルーン（g）

セネガル北部サンルイの出身で、バオバブには結成直後から77年頃まで在籍。

シャーリー・ンジャエ（b）

セネガル南部カザマンズ地方出身のベーシストで、バオバブには70年代の始めに加入。

ムンタガ・コイタ（d s、トゥンバ、ジェンベ）

マリ系のセネガル人で、サクソのイサのいとこ。バオバブには70年代初頭に加入。

バラ・シディベ（v o、ティンバレス）

カザマンズ地方セディオウの出身で1942年生まれ。U. C. A. S.（59年に結成されたセディオウの名門バンド）やギニア・ジャズなどを経由してバオバブに参加。バオバブには最後まで残り、リーダーも務めた。解散後は元スター・バンドのパペ・フォール率いるアフリカン・サルサなどで活動。

メドゥーン・ジャロ（v o）

バラ・シディベとともにグループ最初期から活躍したが84年頃に脱退。92年に元オーケストル・ナン

バーワンのパペ・セックらとサルサ・ユニット、アフリカンドを結成し、世界的な大ヒットを連発している。

ルディ・ゴミス (ルドルフ・ゴミス) (v o)

1947年生まれ。ギニア・ビサウ出身のフルベ系 (父はセネガル人、母はギニアビサウ人)。リベルテ・バンドなどを経た後、ダカールでB・シディベと出会いハーレム・ジャズなどで活動。スター・バンド経由でバオバブに参加。86年に脱退し、その後はダカールで語学学校を運営していたようだ。

ンジャガ・ディエン (v o)

セネガル遠洋に浮かぶ島国カボヴェルデの出身。72年に加入、74年にL・ンバウブが死去した後は、彼のパートも担当することになった。

アサン・ンバウブ (v o)

若手グリオ系歌手でダカールでの人気も高く、『Nate-Yi』、『Jaaboot』、『Guedj Mba Mboulane』などのンバラ作をリリースしている。L・ンバウブのレパートリーを歌えることから、今回ユッサー・ンドゥールに誘われてバオバブに参加した。

【曲目紹介】

1. Bul Ma Miin

オリジナルは『Mouhamadou Bamba/Bawobab-Gouye-Guide Dakar』(80年)で、ンジャガ・ディエン作。いかにもウォロフ的なN・ディエンのヴォーカルが魅力的なアフロ・キューバンで、艶やかなギター・ソロにも魅了される。

2. Sutukun

オリジナルは『Bawobab 75/Orchestre du Bawobab』(75年)で、『Ndeleng Ndeleng』(78年)でも再演している。リード・ヴォーカルは、バラ・シディベ。マンディングの有名な曲で、バオバブ以外にも、ユッサーのエトワール・ドゥ・ダカールや、イファン・ボンディなど、レパートリーとしていたグループも多い。終盤サックス2本が奏でる伸びやかなサウンドが爽快な曲だ。

3. Dee Moo Woor

オリジナルは『Adduna Jarul Naawo/Orchestre du Bawobab』

(75年)のタイトル曲で、N・ディエン作。バオバブの70年代前半の録音を集めたオランダのダカール・サウンドの編集盤CD『Baobab-N' Wolof』(98年)にも収録されている。サイケデリックなギターやコンガの音などは、70年代前半の彼らの革新的なサウンドをよく再現している。リードは再びN・ディエン。

4. Jiin Ma Jiin Ma

オリジナルは『Ndeleng Ndeleng』(78年)で、B・アティッソのギター・ソロがとにかく素晴らしい。リード・ヴォーカルはルディ・ゴミスで、ギターの裏でパーカッションを模して舌打ちしているのも彼だ。次第にジワジワ盛り上がる様は、パチャングなどのラテン音楽の感覚が、彼らの体いかに染み込んでいるかを物語っている。

5. N' Dongoy Daara

オリジナルは『Visage du Senegaal/Orchestre du Bawobab』(75年)で、故レイ・ンバウプ作。リードを務めるのは新加入のアサン・ンバウプで、レイを彷彿とさせる伸びやかなハイトーンが魅力的。

6. On Verra Ca

『Ndeleng Ndeleng』と『Baobab a Paris』(ともに78年)に収録。76年以降、彼らのシグネチャー・ナンバーとして歌われており、よく聴くとメンバーひとりひとりのことを歌った歌詞になっている。リードは、バラ・シディベ。

7. Hommage A Tonton Ferrer

オリジナルは『Senegambie』(82年)の「Utrus Horas」(『パイレーツ・チョイス』にも収録)で、ルディ・ゴミスのメロウなナンバー。リードは、R・ゴミス、N・ディエン、B・アティッソ、A・ンバウプ、それにゲスト参加のイブライム・フェレールとユッサー・ンドゥール。こうして聴くとユッサーの個性の突出振りが分かるが、彼がこうしたアフロ・キューバンを歌うのはおよそ20年振りのことではないだろうか。

8. El Son Te Llama

オリジナルは『Baobab a Paris』(78年)収録曲。リードはメドゥーン・ジャロ。こうしたダンサブルなサルサ調の曲をぐいぐい引っ張るノリの良さは、アフリカンドの看板ソネーロとして面目躍如たることだろう。実はイブライム・フェレールたちの『アフロ・キューバン・オール・スターズ』(97年)に収録された「Amor Verdadero」と同じラテンのスタンダード・ナンバーなの

だが、ホーンズが切れ味鋭くパーカッシヴなアフロ・キューバン・オール・スターズと比較すると、まろやかなバオバブ・サウンドの特徴が分かりやすいだろう。

9. Gnawe

オリジナルは『Mouhamadou Bamba / Baobab - Gouye - Gui de Dakar』（80年）で、バテレミ・アティツン作。リードはR・ゴミスとB・アティツンで、トーゴのミナ語で歌われているとのこと。軽やかなラテン風味の曲でイサのサククスも絶妙なノリを示している。

参考：

オーケストラ・バオバブ・ディスコグラフィー

<http://www.ne.jp/asahi/fbeat/africa/07-disco/07052.html>

オーケストラ・バオバブ・ヒストリー

<http://www.ne.jp/asahi/fbeat/africa/11-senegal/11002.html>

2003年1月

♪

- 2003年に発売になった日本盤のライナーノーツ原稿
- 誤りや補足したい箇所がある（後日補足する予定）。
- 参考リンクのURLは変更になっている（これも後日修正予定）。

協力：ワーナーミュージック・ジャパン

DJ (<http://www.fbdj.net>)

2007.10.23